相模経済新聞　2021年6月10日号

宇宙生命哲学

ことはじめ

36

北里環境科学センター
名誉顧問／宇宙生命哲学者
伊藤　俊洋

我々は高次元巨大環境生命体の一部分である

宇宙から見ると、我々が棲む地球は、漆黒の闇の中に浮かぶ、青く輝く宇宙船のように見える。当コラムの主題である「宇宙生命哲学」的に考えると、地球は、高次元巨大環境生命体と考えることができるだろう。現在、この地球上には、77億人の人類がひしめきあいながら、新型コロナウイルスへの対応に右往左往している。特に、インドで発生したデルタ型変異株の感染力と重症化の速度は、尋常でない。

一部の国では、十分なワクチンの接種により、生活環境が改善されているが、全体として、地球はまだパンデミックの最中にある。米国は、我が国を、最警戒国に指定している。一旦、通常の生活に戻った中国でも、デルタ型変異株の流入により、ワクチンパニックが起こっている。更に、新しい変異株の発生も予測され、世界のパンデミックの行方は、まだしばらく予断を許さない。

もし五輪・パラリンピックを強行するのであれば、あらゆる場面を想定して、対策を立てなければならない。1・2万人の選手の他、来日する10万余の五輪関係者の行動を十分に監視し、安全を保障することは、緊急事態の下では容易ではない。全国的に医療環境が逼迫している状態で、感染爆発が起これば、取り返しがつかない事態となる。

アポロ8号から見た「地球の出」
(W.アンダース　1968年12月24日)

アンダーコントロールされている筈の汚染水は、10年間、地上に貯蔵され続け、いわば野ざらしで、無防備の状態で放置されている。もし仮に、テロや天変地異が起こったら、住民の安全は守れるだろうか。これは、ほんの一例であって、我が国の防衛網は、極めて軟弱そうに見える。

我が国は、何故このように無防備で不安定な状態に落ち込んでしまったのだろうか。それは、国を上げて平和ボケに陥り、国をはじめ組織の長が、ことに当たって、あまねく責任を取らない、いわゆる無責任体制が蔓延していることにあるように思う。その延長線上に、現在の緊急事態があるのではないか。この付けは、いずれ全ての国民に、更には将来の子供達にも降りかかって来る。

100年に一度の国難に当たっては、目先のことに囚われず、国民の安全・安心を第一に、さらには世界の安全・安心に繋がる政治に専念するべきであると考える。その際、我々は高次元巨大環境生命体の一部であるという、宇宙生命哲学的視野で物事を考える必要があると思う。